

埼玉県立 川の博物館が『荒川流域の高低差まるわかりMAP』を作成 ～航空レーザ測量による数値地形モデルの普及活用～

公益財団法人 日本測量調査技術協会

(公財)日本測量調査技術協会は、空中計測・マッピング部会レーザワーキンググループ編纂による『航空レーザ測量による災害対策事例集』を2013年に刊行しました。航空レーザ測量では、地表面などについての精密な標高データが面的に均一な精度で得られ、地形災害が多い我国の災害対策に広く活用されています。同書では防災分野での活用事例のほかに、航空レーザ測量で得られた高精度の数値地形モデルを用いた各種地図表現も併せて紹介しています。

このたび、このような数値地形モデルを利用した興味深い地図が刊行されました。埼玉県立 川の博物館(埼玉県大里郡寄居町小園39)による主題地図『荒川流域の高低差まるわかりMAP』(税込300円)です。

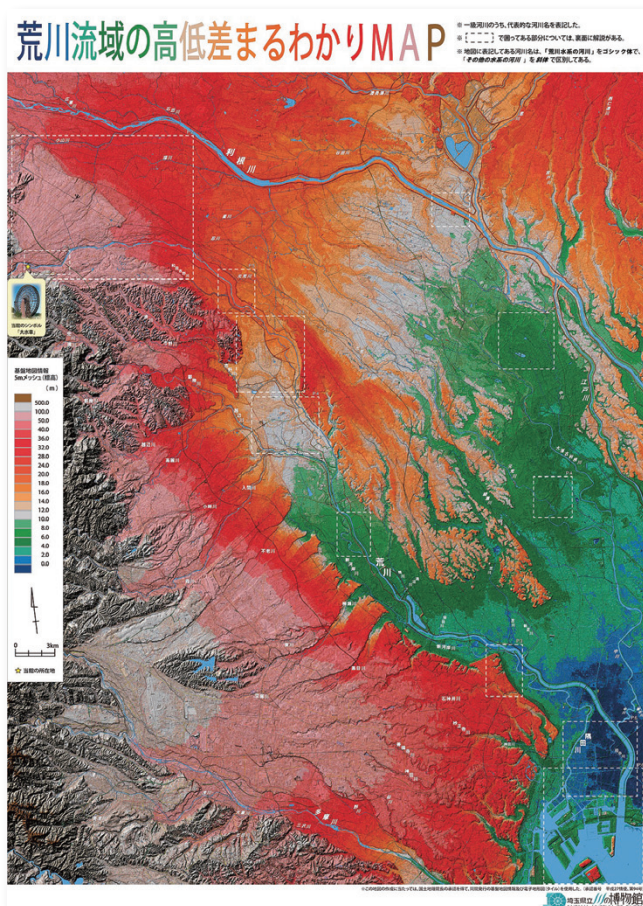
この地図では、荒川が秩父山地から関東平野に流れ出す寄居付近から、東京湾に注ぐ東京都江東区・江戸川区付近までを含む、東西約60km・南北約70kmの範囲の地形を表した段彩陰影図を表図として、裏面に荒川流域の歴史の変遷や流域地形の解説文を載せています。段彩陰影図は、国土地理院の基盤地図情報(数値標高モデル)を解析したものです。基盤地図情報(数値標高モデル)のうち5mメッシュデータは、国土交通省の地方整備局や国土地理院が航空レーザ測量を用いて、直轄河川流域や海岸地域を中心に整備したものです。

数値地形モデルの地図表現としては、上記『事例集』で紹介した各種地図表現とともに、国土地理院の印刷地図『デジタル標高地形図』シリーズが知られ、最近ではWeb地図『地理院地図』の1レイヤとして段彩図「色別標高図」を見ることができます。『荒川流域の高低差まるわかりMAP』は基本的に段彩表現ですが、色区分の工夫によって、広域の地形区分と平野部における自然堤防や後背低地等の微地形表現とがある程度両立し、非専門家でも荒川流域の地形の特徴が解るようになっています。

航空レーザ測量は、比較的高価なこともあって、これまでは専門家向けに使われることが多かったのですが、この『荒川流域の高低差まるわかりMAP』のような地図などを通して、航空レーザ測量の成果が一般市民に親しいものになり、広く普及していくことが期待されます。

埼玉県立 川の博物館(略称:かわはく)

<http://www.river-museum.jp/>



自然がつくった地形 ～その2

この地形に注目! =昔の川の跡=

